

9. 思春期における顎関節症の原因についての考察 —顎関節構造、顎顔面形態そして咬合機能より—

○森主 宜延、奥 猛志、*大野 秀夫、小椋 正

(鹿大・歯・小児歯、*下関市開業)

思春期における顎関節症は、症状が発症間もないこと、発症原因が成人に比べ明瞭と考えられることから、予防学的医療対応が適切並びに有効な疾患と考えられる。我々は、過去の報告に基づいたこの様な観点から、集団を対象とした発症の衛生統計学的調査、当講座に治療のため来院した患者からえられたレントゲン写真による顎関節構造、顎顔面形態にかんする資料、そして咬合機能にかんする資料をもとに、思春期における顎関節症の予防学的管理の意義並びに臨床的体系の確立を試みてきた。いまだ確認並びに追求しなければならない課題は、残されているものの、一応の原因を明らかにし、そして臨床体系を組み立てることができたので報告する。

1. 発症の頻度と特異性：

発症頻度は10%前後で主たる症状は顎関節雑音であった。中学生で発症がみとめられ、高校生時期において増加し、3年生で成人とほぼ同様の頻度に達する。

症状の個人内変動がみとめられた。しかし、症状の内、顎関節雑音は最も安定した発症をみた。

2. 原因として咬合の不正が形態並びに機能の分析から明らかにされた。特に咬合の不正を生じさせることとして、上下顎の形態的不調和が関係していることが明らかにされた。

3. 顎関節構造のFCRによるレントゲン写真解析から

末永の分析の type A 41%、type B 7.4%の顎関節の動き方にもとづく異常が示された。